

近藤院長の主な著書

『ガンになってもあきらめないで！ —注目されるハイパーサーミア（温熱療法）の効果』

（毎日健康サロン/清風堂書店 2012年）



千春会では「千春会ハイパーサーミアクリニック」を開院し、ガンに悩む患者さんの治療と心身のケアを行っています。そこで威力を発揮しているのが「ハイパーサーミア」と呼ばれる「ガンの温熱療法」です。

ガン治療は、手術・放射線療法・化学療法の3本柱が標準治療と呼ばれ、それなりの成果をあげていますが、日本人の死因のトップをガンが走り続けているという現実は変わりそうにありません。

そこに登場したのが「ハイパーサーミア（ガンの温熱療法）」で、健康保険が使えるこの治療法を、著者は以前から「第4のガン治療」と位置づけています。

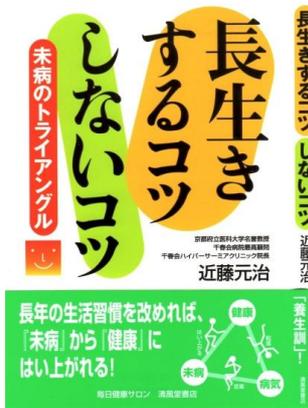
ガン治療の現場を眺めますと、化学療法の効果が見られなくなると、「ここで出来る治療は全てやりました。これ以上することがありませんので、どこか緩和医療の病院かホスピスを自分で探して下さい」と縁を切られることが多いようです。

著者の信念は、「医療者は最後まで患者さんを見捨ててはいけません。たとえ化学療法の効果が薄れても、ハイパーサーミアを使えば患者さんにガンと戦う前向きな姿勢を持たせることが出来るから、良いQOL（生活の質）が得られる」というものです。ガンとの戦いに、われわれにはハイパーサーミアという武器がありますから、「ガン治療はネバー・ギブ・アップ（あきらめてはいけません）の精神で」と言い続けています。

本書はやさしい実例を交えながら、ハイパーサーミアの全てを取り上げている、分かりやすい読み物になっています。ガン患者さんだけでなく、ご家族も、そして今は元気なあなたの、必読の書です。

『長生きするコツ しないコツ —未病のトライアングル』

(毎日健康サロン・清風堂書店 2013年)



健康に関する書物が氾濫するなかで、先ずタイトルに惹かれます。ページをめくると「亭主を早死にさせる9ヶ条」で度肝を抜かれ、健康のためのノウ・ハウが江戸時代に書かれた貝原益軒の「養生訓」で述べられているのを知ります。その中で「未病を治すのが名医」とあるように、未病と言う考え方は四千年前の中国医学にあるのが分かります。

現在の医療は検査中心の西洋医学で、さまざまな訴えの患者さんでも、検査で異常が見つからないと正常、つまり健康に色分けされ、グレイゾーンの患者さんは切り捨てられます。

著者は「未病」「健康」「病気」を頂点にした3角形を描き、「未病のトライアングル」を提言しています。「ボケたくないなあ」「ガンになりたくないなあ」「寝たきりはいやだなあ」など、読者が不安に思っていることを解説、最後は「21世紀の健康長生き大作戦」で締めくくっています。

楽しく読める本書は爆発的にヒットしていますので、是非読んでみて下さい。

『ドク ガンと闘う』 [ドク・シリーズ第1弾] (いわはし書店 2006年)



タイトルを見て、「ドク」って何だろう?と思われたことだろう。京都の祇園に大正時代からある古いバーが舞台である。カウンターに座りひとり静かにギムレットをすする開業医が主人公だが、その雰囲気西部劇「OK牧場の決闘」で保安官ワイアット・アープを助けるギャンブラーで外科医のドク・ホリデーに雰囲気が似ていると誰かが言い出したので「ドク」と呼ばれている。その男が客やマダムを相手に「ガン告知」「安楽死」「尊厳死」など医療について経験をまじえて語るのだが、その合間に四季折々の京都の行事や風景がちりばめられているのが目新しい。実はこの男、永年母校の京都府立医大で教育・

研究・診療に明け暮れていたのだが、開業していた父親がガンで亡くなり、急遽跡を継いで開業医になったという経緯がある。医科大学での様々なガン患者との触れ合いには真実味があり、また医学生のパリクリと呼ばれる実習風景は、医科大学で診察を受けた経験のある読者なら、思わずにんまりと頬がゆるむ面白さがある。

『ドクとイカロスの翼』[ドク・シリーズ第2弾] (いわはし書店 2009年)



これもタイトルが、読者を惑わせるかも知れない。「イカロス」とはギリシャ神話に出てくる若者で、鳥の羽をロウで固めて背中につけ空を飛んだのだが、有頂天になって太陽に近づき過ぎたためにロウが溶けて海に落ちたという物語。このことから、イカロスは「飛行機乗り」の代名詞になり、また「向こう見ずな」という意味にも使われる。

明治時代の中頃、二人の若者が伊予・松山からアメリカに向かっている。松山は司馬遼太郎氏の『坂の上の雲』のテレビ放映で話題を呼んでいる土地で、主人公も秋山兄弟や正岡子規と関わりを持っていた。

アメリカで飛行家になった「近藤元久」が、アクロバット飛行で有名になっているというニュースを当時の新聞で読んだ「ドク」が興味を持ち、その足跡を追う内に、日本で凱旋飛行をすることなく航空機事故で亡くなったことを知る。そこには、折から高まっていた黄色人種に対する人種偏見がからんでいたのではないかとのサスペンスが盛られている。

もう一人の「近藤元照」は、苦勞の末に事業を成功させたのだが、そこにも人種偏見の波が押し寄せていて、アメリカの日系人の苦勞話が、いろいろのエピソードをからめて描かれている。真珠湾攻撃をきっかけに日米が開戦すると、彼もすべての日系人と共に強制収容所に入れられた。彼には息子と孫のいたことが米軍の記録に残されていたけれども、戦後の行方は杳として知られなかった。

彼ら二人の足跡を「ドク」と「筆者」が10年という年月をかけて追うという展開は、ノンフィクションに少しばかりフィクションの味付けをした、「坂の上の雲に隠れたもう一つのドラマ」として好評をいただいている。

『新 第4の対ガン戦略 ハイパーサーミア』 (いわはし書店 2006年)



外科手術・化学療法・放射線療法がガンの3大治療法とされているが、それでも日本人の死因のトップは「ガン」である。加えて大病院で3大治療を受けながらも進行したため治療を打ち切られる「ガン難民」は、増加の一途をたどっている。そこに第4の治療法として登場したのが「ハイパーサーミア」で、電磁波加温装置を用いてガン病巣の温度を42℃以上に上げることで治療効果を高めることができる。今、患者や家族が注目している治療法を、誰にでも分かるように解説した本書は、この領域での隠れたベスト・セラーになっている。

『ガンの温熱化学塞栓療法 — 息の根を止めて焼き尽くせ』 (南山堂 2001 年)



肝臓の様に大きく血流が豊富な臓器のガンは、体外からの電磁波加温を行ってもせいぜい40℃までしか加温できない。著者らが開発した「温熱化学塞栓療法」は、じゃがいも澱粉の小粒子に少量の抗ガン剤を混ぜてカテーテルで腫瘍内血管を塞栓し、その間にハイパーサーミアを行う方法である。これにより最高で腫瘍内温度が46℃にもなり、巨大な肝ガンが消失したという劇的な効果をみている。京都府立医大第1内科で開発された本法の歴史を、孫子の兵法に喩えながら面白い読み物に仕上げている。中でも機関銃で打ち抜いたような胃ガンの肝転移が見事に消えた例は、今でもハイパーサーミアの世界での語り草になっている。それまで放射線治療との併用でのみ健康保険が適用

されていたハイパーサーミアだったが、当時の厚生省の役人がその効果に驚き、単独でも、化学療法との併用でも、ハイパーサーミアに健康保険が使えるよう規約改正をするに至った画期的な治療法である。

『ハイパーサーミアのABC』
(いわはし書店 2002 年)



『処病術 読んで損はさせない医師からの
アドバイス』
(同朋舎 2001 年)



『O₂・活性酸素物語』

(南山堂 1997 年)



『免疫細胞奮戦記』

(HBJ 出版局 1997 年)



『我輩はエイズウイルスである 何度言ってもわからない情けない人間たちにおくる慨嘆のメッセージ』

(HBJ 出版局 1994 年)



『どうなるエイズ どうする京都』

(京都新聞社 1993 年)



『医師からの助言 医療との上手な付き合い方』

(京都新聞社 1993 年)



『フリーラジカルって何だ?』

(日本医学館 1991 年)



『これだけは知っておきたい エイズの常識』

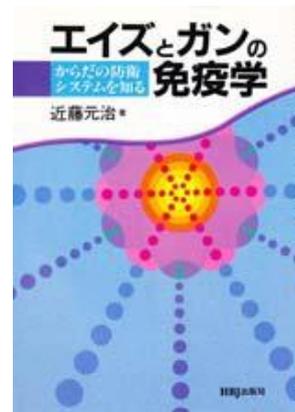
(ぱすてる書房 1987年)



『エイズとガンの免疫学』

体の防衛システムを知る』

(HBJ 出版局 1986年)



『補体学入門』

(南江堂 1980年)



『癌免疫療法』

(金芳堂 1980年)

